

ケム型疑問文の特質

—間接疑問文の成立論のために—

高山善行

1 はじめに

間接疑問文は中世期に成立したとされているが、古代語における実態については十分な調査がなされていない。本稿では通説を検証するために、間接疑問文の成立を考える上での鍵となるケム型疑問文（ケムが生起した疑問文）の記述分析をおこなう。ケム型疑問文とは以下のような例を指す。

- ・御死にもやしたまひけむ、え見つけたてまつらずなりぬ。竹取 37
- ・いかがありけむ、その男すまらずなりにけり。伊勢 195

2 研究史

間接疑問文については、伝統的な国語学における文法史研究ではあまり注目されてこなかった。近藤(1987[2000])は古代語疑問文の研究の基本文献として知られているが、間接疑問文に光を当てた点も注目される。

(1)

…中古語の疑問文は単文にしかねれず、決して複文中の従属節になれないということがある。すなわちいわゆる間接疑問文が存在しないのである。これは係結びというものがある以上、当然のことであるが、現代日本語ではそうではない（例えば、「どこへ行ったかが判明した」のような文）英語でもそうではない。従って、単文にしかねれないのは、古典語の疑問文の大きな特徴であるといえる。（近藤 1987[2000], p. 273）

高宮(2004)は間接疑問文の成立時期、成立過程について論じた画期的な研究である。ただし、高宮論文は中世語の検討が中心であり、古代語に関しては近藤論文を継承している。

(2)

平安時代を中心とする古代語には、間接疑問文の存在しないことが近藤 2000 によって指摘されている。（高宮 2004, p. 122）

[以上、下線筆者]

「古代語における間接疑問文の非存在」という理解は、衣畑・岩田(2010)にも受け継がれている。係り結びの発動によって文が成り立ってしまうから、「や」「か」の疑問文を文中に組み込むことができないと考えるのは自然である。

(3) (作例)

- a * [いかなる花か咲かむ] 知らず。
- b * [花や咲くらむ] 知らず。

なお、衣畑(2014)では、「係り結びが間接疑問文を抑制する」という興味深い仮説を提示している。

このように、通説では、「間接疑問文は係り結びが衰退した中世期に成立した」というストーリーを描いている。

しかしながら、原点に立ち戻って検討すると、次のような疑問点が生じる。

(4)

1) 非存在の証明

一般論として、「非存在」を証明することは困難である。「存在」は用例によって認定しうるが、「非存在」はどのようにして認定すればよいのだろうか。筆者は次の2点が必要であると考え。第一に「理論的に存在しえないこと」、第二に「用例の非存在を確認すること」である。現在、この2点が十分でない。したがって、間接疑問文の成立に関して「古代語での非存在」を前提とする議論は脆弱性を有する。¹

2) 調査資料・調査方法

先行研究では、どういう調査をしたのか、どういう方法で調査したかが明らかでない。網羅的な調査が必要とされるであろう。近藤論文は、古代語での「非存在」に言及するのであるが、疑問文における推量の助動詞の生起を説明する上で言及しているものである。今後は、「間接疑問文の存在／非存在」という動機づけに基づいた調査分析が必要ではないか。

¹ 近藤(1987[2000])は間接疑問文に焦点を当てた論文でない。しかしながら、その後の研究では、古代語での間接疑問文の非存在が前提となっているようである。筆者自身も非存在を疑ってこなかった。

3) 係り結びの範囲・衰退の時期

係り結びの範囲は研究者間で一定していない。²たとえば、日本語学の概説書等では、解釈文法をベースにした規範的な係り結び（ゾ、ナム、ヤ、カ、コソ）を範囲とし、それらが中世期に衰退したとするのが一般的な見方であろう。一方、中古において既に形骸化・形式化しつつあるという説もある。³個々の係助詞に目を向けるなら、ナムは中古の段階で係助詞としての活力を失うし、上代～中古に機能領域を縮小する力も活力を失いつつあるといえるかもしれない。つまり、上代、中古であっても、係り結びが発動しにくい条件下では、間接疑問文が存在する可能性が否定できないのである。

以上のような疑問点が認められる以上、通説をそのまま受け入れることはできない。通説の妥当性を検証するためには、間接疑問文の存在／非存在を古代語で調査する必要がある。

3 研究の目的

3.1 用例群

高山(2015)では古代語疑問文の用例調査を行った。⁴その調査のなかで間接疑問文のように見える用例群が確認された（本文、現代語訳は新全集による。以下同じ）。

(5)a. [地の文]むかし、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、近衛府にさぶらひけるおきな、人人の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみて奉りける。

大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめ
とて、心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、しらずかし。

(伊勢 76 段・178→古今 871)

(～と詠んで、翁(=業平)は自分の心の中にも深い嘆きをいただいたのであろうか、どう思っただろうか、それはわからない)⁵

b. [地の文]あけて見るに、悲しきことものに似ず、よよとぞ泣きける。さて返しはいかがしたりけむ知らず。（大和 148 段・380）

² 高山・青木(2010)「第8章係り結び」の「研究テーマ」参照。

³ 野村(2005)では、「中古中期は係り結びの末世」「形式化・形骸化」とする。

⁴ 高山(2015)は、「疑問と推量」の関係に焦点を当てたものであり、間接疑問文については事実の指摘にとどめている。

⁵ (5a)は、疑問詞「いかが」（現代語「どう」にあたる）が使用されており、現代語「かどうか」に類似する面をもつ。

c. [地の文]車に着たりける衣ぬぎて、つつみに文など書き具してやりける。さてなむかへりける。のちにはいかかなりにけむ、知らず。

あしからじとてこそ人のわかれけめなにか難波の浦もすみ憂き

(大和 148 段・380)

(女はそれをあけてみたところ、たとえようもなく悲しくなって、おいおい声をあげて涙を流して泣いた。返事はどうしただろう、それはさて知らない。女は車で着ていた着物をぬいで、その包みに手紙などを書きそえてやった。そして都へ帰った。のちにはどうなっただろう、それは知らない。)

d. [地の文]監^{げん}の命婦^{てうはい むぎ}、朝拝^{だんじやう}の威儀^{みこ}の命婦にていでたりけるを、弾正の親王 (= 元平親王) 見たまひて、にはかにまどひ懸想したまひけり。御文ありける御返りごとに、

うちつけにまどふ心と聞くからになぐさめやすくおもほゆるかな

親王の御歌はいかにありけむ、忘れにけり。⁶ (大和 78 段・305)

(監の命婦が元旦の拝賀の儀式に威儀の命婦として出ているのを、弾正の親王がご覧になって、急に思いみだれ、恋をなされた。お手紙をいただいたお返事に、監の命婦は、つぎのような歌を詠んだ。

一旦私をご覧になって急にお心をお乱しになったとうかがいましたので、それではその恋心もすぐさめて、たやすく心をおちつけることがおできになるものと思われますよ

親王のお歌はどのようなものだったのだろう、忘れてしまった。)

e. [歌]女のもとより、詞^{ことば}はなくで、

君や来しわれやゆきけむおもほえず⁷夢かうつつか寝てかさめてか
男、いといたう泣きてよめる、

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ

とよみてやりて、狩にいでぬ。 (伊勢 69 段⁸・173 →古今 645)

(女のもとから、手紙の詞はなくで、歌だけ贈ってきた。

⁶ cf. 「返しを人なむ忘れにける。」 (大和 397)

⁷ 「君や来し」の歌の解釈については、小松(2012)参照。

⁸ この段は、唐代伝奇小説『鶯鶯伝』を意識したといわれ、歌の作者は在原業平と推定されている。(5a)(5e)ともに第一次伊勢物語とされる。片桐(2013)参照。

あなたがおいでになったのか、私が伺いましたのか、判然といたしません。いったいこれは夢でしょうか、目覚めてのことでしょうか

男は、ひどく泣いて詠じた。

悲しみに真っ暗になった私の心は、乱れ乱れて、分別もつきませんでした。夢か現実かは、今晚おいでくださって、それで、はっきりお決めください)

以上の例は間接疑問文のように見える。しかしながら、そのことをもって直ちに、「間接疑問文が古代語に存在した」と結論づけるのは適切とは言えない。これらの用例群はどのような構文と関連づけられるか、どのようなプロセスを経て成立したか、についての検討がなされていないからである。それらの検討なしに、「存在／非存在」を議論したところで生産的な議論にはならないと思われるのである。

3. 2 用例群の特徴

まず用例群の特徴について見てみよう。わかりやすい特徴として、すべての疑問文にケムが使用されている（ケム型疑問文）点を指摘することができる。ケムはもともと疑問文で使われやすいが、問題例のすべてにケムが使用されるのは重要な共通点といえる。疑問文のタイプを見ると、以下のようなものである。

(6)

- | | | |
|---|-------------------|---|
| { | 疑問詞疑問タイプ……b, c, d | 〈イカガ〜ケム〉 + 動詞 |
| | 選択疑問タイプ ……a, e | 〈〜ヤ〜ケム、疑問詞〜ケム〉 + 動詞 〈〜ヤ〜ケム、〜ヤ〜ケム〉 + 動詞 |

疑問詞疑問文、選択疑問文はあるが、肯否疑問文（〈〜ヤ〜ケム〉 + 動詞）は見られない⁹疑問詞では、「いかが」のみが用いられている。係助詞「か」による係り結びが回避されているのである。動詞述語では、「知らず」「思ほえず」「忘る」の三種が用いられている。これらは、意味的に「事態の不確かさ」と

⁹ 金水(2015)では、間接疑問文の発達をリスト表現の観点から述べている。高宮(2004)で、選択疑問文タイプが先行し、疑問詞疑問文タイプ、「〜かどうか」タイプの出現が遅れるという指摘を受けて、「このことは、疑問詞疑問文の間接疑問文が、直接疑問文から作られたのではなく、リスト表現の中で選択タイプから疑問詞タイプへと発達したことを暗示している」という。金水(2012)も参照。

結び付き、間接疑問文の述語動詞となりうる。さらに、これらが『伊勢物語』『大和物語』という歌物語で見られることも注意しておきたい。

主な特徴をまとめると、以下のようになる。

(7)特徴

- ①すべてケム型疑問文である。
- ②動詞は、「知らず」「思ほえず」「忘る」が生起している。
- ③疑問詞はイカガのみである。cf. イカニカ→イカガ カが吸収される
- ④『伊勢』『大和』にあるが、『竹取』にない。

用例群の位置づけを知る上では、①～④の検討が必要であるが、その手始めとして、本稿ではケム型疑問文に焦点をあてる。ケム型疑問文の記述分析を通して用例群の位置づけについて考えてみたい。

4 ケム型疑問文¹⁰の調査・分析

4.1 基礎調査

まず、ケム型疑問文について基礎調査を行う。比較のために、ム型疑問文、ラム型疑問文にも光をあてる。用例群は平安初期に成立した歌物語のものであった。そこで、今回は『伊勢物語』『大和物語』を資料として調査をおこなう。比較のために、平安初期成立とされる『竹取物語』も調査対象とする。調査資料、使用テキストは以下のとおりである。

資料¹¹：『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』

テキスト：新編日本古典文学全集（小学館）。発表資料の用例本文・現代語訳は新全集本による。

なお、以下では便宜上、ム、ラム、ケムを一括して「ム系」と略記することがある。

まず、上記三作品の疑問文の用例数を表1で示す（疑問／反語、疑問詞疑問／肯否疑問は区別しない）。

[表1 疑問文の作品別用例数]

| 作品名 | 用例数 |
|------|-----|
| 竹取物語 | 7 1 |

¹⁰ 高山(2015)では、これまでの研究の視点を転換し、「モダリティの観点から疑問文を捉える」方法を提案した。本稿の「ケム型疑問文」は、その事例研究のひとつといえる。

¹¹ 中古語の調査資料で『源氏物語』が使用されることが多い。しかし、上代語との連続性を見る上では問題がある（後述）。

| | |
|------|-------|
| 伊勢物語 | 1 1 7 |
| 大和物語 | 1 9 5 |
| 計 | 3 8 3 |

三作品全体で疑問文は383例ある。各作品における疑問文の用例数は作品の言語量とおおよそ比例する。次に、各作品におけるム系の用例数を表2で示す。

[表2 ム系の総用例数]

| | 竹取 | 伊勢 | 大和 | 計 |
|----|-------|-----|-------|-------|
| ケム | 7 | 3 4 | 3 7 | 7 8 |
| ム | 1 5 5 | 9 7 | 1 7 0 | 4 2 2 |
| ラム | 6 | 2 4 | 4 0 | 7 0 |

表2をみると、『竹取』ではケムが少ない（ラムも少ない）。『竹取』は、もともとケムが少ないのだから、ケム型疑問文が少ないことが予想される（後述）。ム系の総用例数ではムが最も多く使用されていて、422例にのぼる。ムの用例数は、ケムとラムのおよそ6倍である。

次に、ム系の疑問文での使用率を表3で示す。

[表3 ム系の疑問文使用率]

| | 疑問文／総用例数 | 疑問文使用率 |
|----|----------|--------|
| ケム | 67/78 | 85.9 |
| ム | 107/422 | 25.3 |
| ラム | 36/70 | 51.4 |

表3より、ケムは8割以上が疑問文で用いられている。ム、ラムと比べて、疑問文使用率はケムが突出している。ケムが疑問文での使用率が高いことは、先行研究で指摘されたとおりである。¹²

さて、ケム型疑問文の作品別用例数は表4のとおりである。

¹² 松尾(1943)参照。

[表 4 ケム型疑問文の作品別用例数]

| | 用例数 |
|------|-----|
| 竹取物語 | 6 |
| 伊勢物語 | 30 |
| 大和物語 | 31 |
| 計 | 67 |

三作品でケム型疑問文は67例見られる。先述のように、『竹取』ではケムの用例そのものが少ないので、『竹取』のケム型疑問文は少ない。『伊勢』『大和』のケム型疑問文の用例数は『竹取』の5倍程度ある。

次に、ケム型疑問文の使用される文タイプをみてみよう。表5は文タイプ別の用例数である。

[表 5 ケム型疑問文一文タイプ別用例数]

| 文タイプ | 用例数 |
|------|-----|
| 地の文 | 51 |
| 会話文 | 2 |
| 心内文 | 4 |
| 歌 | 8 |
| その他 | 2 |
| 計 | 67 |

文タイプ別にみると、地の文での使用が51 / 67例であり、圧倒的に多いことがわかる。それに対して、会話文はわずか2例しかない。

(8)

a. (翁) 「いかなる所にかこの木はさぶらひけむ。…」と申す。竹取 30
((翁) 「どのような所に、この木はございましたのでしょうか。…」と申しあげる)

b. 「あはれ、かかるさわぎに、いかになりにけむ。たづねてしがな」とのたまひけるほどに、大和 347

(「ああ、このようなさわぎで、どうなってしまったのだろう。ぜひ訪ねたいものだなあ」とおっしゃったときに、)

ケム型疑問文の主流は、聞き手に解答を要求する疑問文ではないといえる。

4. 2 ケム型疑問文（地の文）

ここでは、地の文に用いられたケム型疑問文を見ていく。地の文のケム型疑問文は以下のようなものである。

(9)

a. 家に入りたまひぬるを、いかでか聞きけむ、つかはしし男ども参りて申すやう、（竹取・48）

（大納言が）家にお入りになるのを、どうして聞いたのだろうか、先に大納言の命で龍の頸の玉を取りに派遣された家来たちが帰参して申しあげるには）

b. この女、いと久しくありて、念じわびてにやありけむ、いひおこせたる。（伊勢・133）

（この女は、たいそう久しくたって、こらえきれなくなってであろうか、歌を詠んでよこした）

c. 大和の国に男女ありけり。年月かぎりなく思ひてすみけるを、いかがしけむ、女をえてけり。（大和・394）

（大和の国に男と女がいた。長い年月の間このうえもなく思って過ごしていたが、どうしたことであろう、男はほかに女をこしらえてしまった）

これらの例から、次のような特徴を指摘することができる。

(10)

- ・語り手が登場人物の行動の事情説明をする。
- ・語り手が事情を推測する形式（擬態的疑問）として固定化している。
- ・はさみこみ構文¹³が多い。

地の文でのケム型疑問文は、疑問文の形をとってはいるが、解答を要求する性質ではない。実際には、事情説明で用いられており、一種の「語りのスタイル」としてパターン化したものである。さらに、注意しておきたいのは、いわゆる「はさみこみ構文（挿入句）」での使用が目立つ点である。どの程度、「はさみこみ構文」で用いられているか、ム、ラムの疑問文との比較を表6で示す。

¹³ 「はさみこみ構文」については、佐伯(1953[1966])、出雲(1985)、小田(2015)参照。

[表 6 ム系疑問文のはさみこみ率]

| | はさみこみ／疑問文 | はさみこみ率 |
|----|-----------|--------|
| ケム | 44/67 | 65.7 |
| ム | 1/107 | 0.9 |
| ラム | 1/36 | 2.7 |

表 6 によれば、ム型疑問文、ラム型疑問文ははさみこみ構文で使用されることがほとんどない。一方、ケム型疑問文ははさみこみ構文で使用される例が 6 割以上ある。同じム系でも、はさみこみ構文の使用に関して、ケムはム、ラムと大きく異なる点が重要である。ム、ラムのはさみこみ構文の使用例を挙げておく。

(11) はさみこみ（挿入句）構文—ム・ラムの例

a. この^{ざいじのきみ}在次君、在中将の東にきたるけにやあらむ、この子どもも、人の国に通ひをなむ、ときどきしける。大和 363

（この在次君は、在中将が東国に行ったからであろうか、この子供たちも、よその国に旅をときどきしたのだった）

b. (家来) 「～ただし、子をうむ時なむ、いかでかいだすらむ、侍んなる」と申す。竹取 50

（ただ、子を産むときには、どのようにして出すのでございましょうか、子安貝があるようございます）

ケム型疑問文は、大半が地の文において使用され、かつ、はさみこみ構文の使用率が高いのであった。それらの例は以下のような意味構造をなしている。

(12)

| [注釈句] | [被注釈句] |
|---------------|-------------------------------|
| この女、いと久しくありて、 | [念じわびてにやありけむ][いひおこせたる] |
| | (こらえきれなくなってであろうか) (歌を詠んでよこした) |

ここではさみこみ構文の後部要素に注目してみよう。後部の二句は、[注釈句＋被注釈句]という複文構造をなす。これは、野村(2002)でいう「注釈構文」である。歌物語地の文の注釈構文は、はさみこみ構文の構成要素となっている。

4. 3 注釈構文

ここで、野村(2002)の注釈構文について確認しておこう。注釈構文は上代から現代に至るまで用いられている。上代には以下のようなものがある。¹⁴

(13) 注釈構文¹⁵—上代

- a. 我妹子に恋ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮き寝の安けくもなき(万葉集 2806)
(あの娘に恋い焦がれているからだろうか、沖に住む鴨の浮き寝のように、心がやすらかでない)
- b. 足引の山かも高き卷向の岸の小松にみ雪降り来る (同 2313)
((あしひきの) 山が高いからか、卷向の岸の小松に雪が降ってくる)

注釈構文は、現代においても小説等でしばしば用いられる。

(14) 注釈構文：現代

- a. 落ちる拍子に釘か何かに触ったのでしょう、ちょうど右腕の肘の所の皮が破れて、血がにじみ出ているのでした。(『痴人の愛』)
- b. 離れ落ちる音なのか、からっと乾いた音がする。(『おとうと』)
- c. 冬のせいか、バスの客は多くない。(『古都』)
- d. 菊子はほんとうに恐ろしいのか、肩をふるわせそうにしていた。(『山の音』)
- e. いつのことでしたか、ちょうどその女優の映画を見てから、帰りにとある洋食屋に寄った晩に、それが話題に上ぼったことがありました。(『痴人の愛』)

野村(2002), p. 14

注釈構文の特徴について、野村(2002)は以下のように述べている。

(15)

これらの例では、まず注釈を担当すると思われる部分が、句相当になっている。独立した一文と称してもよさそうなものも混じる。そしてその注釈句には発話主体の判断性が明らかに感じられる。一方、後句(被注釈句)の文内容は、ほぼ事実と言ってよい。注釈句は、その事後的後句に対する発話主体の、何らかの判断を表しているのである。その「何らかの判断」は、原因・理由を中心とした後句の事情説明であることが多いが、「離れ落ちる音なのか」とか「いつのことでしたか」のよ

¹⁴ (9)は、野村(2002)に挙げてある例に新全集本の現代語訳を付したものである。

¹⁵ 野村(2002): 「注釈的二文連置」ともいう。渡辺文法から発想したとのことである(個人談話)。

うに、原因・理由とは言いにくい場合もある。しかし「何らかの判断」とは言っても、その判断性は決して全文の全面に現れるわけではなく、あくまでも付加的なものに過ぎない。現象描写的な事実言明に対して、発話主体が何らかの評価・感想などを付け加えたい、そんな場合に注釈付き文が表現されるのではないと思われる。

野村(2002), p. 14-15

以上、注釈構文の特徴について確認した。

ここでケム型疑問文の問題に戻ろう。ケム型疑問文は地の文での使用が多い(51 / 67)のだが、そのなかに問題例のうち4例が含まれている。それら4例を引くと、地の文におけるケム型疑問文は9割以上が注釈構文で用いられていることになる。

(16)ケム型疑問文の注釈構文使用率

[注釈構文 / ケム型疑問文]

全用例：44 / 67 (65.7%) 地の文：44 / 51 (86.2%)

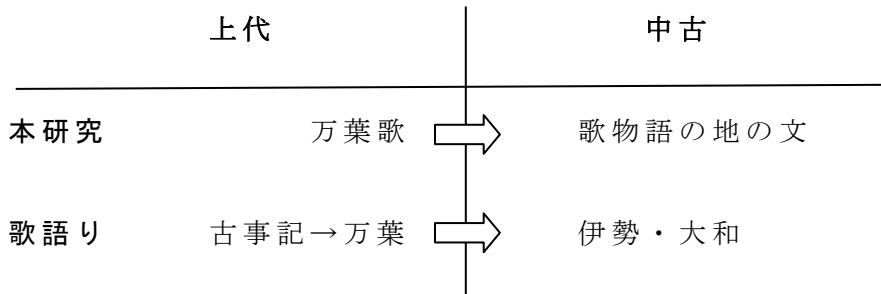
問題例4例を除く → 44 / 47 (93.6%)

要するに、地の文のケム型疑問文は、ほとんどが注釈構文なのである。

ここで注釈構文について通時的観点から考えてみよう。注釈構文は既に『万葉集』において用いられている。『万葉集』の注釈構文が歌物語の地の文に流れ込んだ可能性がある。歌から地の文への流入を想定するのは違和感があるかもしれない。文法史の研究において、歌と地の文は、異なるタイプの文として扱われるのが通常であろう。しかしながら、文学研究や文体史研究における「歌語り」の概念を想起するべきである。たとえば、伊藤(1975)では万葉歌のなかに物語性を見いだす。「歌語り」という捉え方は、片桐(1968)、阪倉(1975)、山口(1984)において継承されている。歌語りは、「記紀歌謡→万葉集→大和物語・伊勢物語」のように展開されているという。これは、本稿が想定する注釈構文の展開過程と一致する。

(17)

[注釈構文の流れ]



今後さらに精査が必要であるが、文学研究、文体史研究との一致は注釈構文の展開を見ていく上で注意すべき事実である。¹⁶

5 用例群の検討

ここまで、用例群の位置づけを解明するための準備作業として、ケム型疑問文について観察してきた。ケム型疑問文は歌物語の地の文で多く用いられ、そのほとんどが注釈構文であった。では、問題となった用例群との関係はどのように考えればよいだろうか。注釈構文と用例群の意味構造を比較すると、以下のようなになる。

(18)

| | 意味構造 | | 用例数 |
|------|------------------------|----------------------|---------------|
| 注釈構文 | 〈心的態度〉 念じわびてにやありけむ、 | 〈ストーリー叙述〉 いひおこしたる | 多数 44 / 67 |
| 用例群 | 〈心的態度〉 いかがしたりけむ、 | 〈心的態度〉 知らず | 少数 4 / 67 |

※用例群のうち和歌の例 (= 5e) を除く

注釈構文では、注釈句で〈語り手の心的態度〉が述べられ、続く被注釈句で〈ストーリー叙述〉にもどる。地の文での〈ストーリー叙述〉は、語り手の推測等は交えず、過去にあった事実として語られる。一方、用例群では、〈語り手の心的態度〉を示した後、後続句で〈ストーリー叙述〉にもどらず、さらに語り手の心的態度が表される。後続句では、語り手の推測した事態 (= 疑問節) に

¹⁶ 上代～中古の通時的記述で、しばしば、『万葉集』と『源氏物語』という資料選択がなされ、歌物語が考究の対象から欠落するのは問題である。文学、文体史との連携が重要である。

対する心的態度が表現されるのである。いま仮に、ストーリー叙述部をA、語り手の心的態度をBで表すなら、注釈構文と用例群は、以下のように表すことができる。

(19) ストーリー叙述 = A、語り手の心的態度 = B

注釈構文：A—[B—A] …… はさみこみ構文の一部

用例群：A—[B—B’] …… 注釈構文と関連（?）

上記を見ると、注釈構文と用例群は転一步であることがわかる。(18)で示したように、量的には、注釈構文の方がはるかに優勢であり、用例群はわずか4例（歌の例は除く）にすぎないから、用例群は注釈構文から派生した新しいタイプの表現である可能性が高いと思われる。

6 課題

本稿では、古代語における間接疑問文の存在について考えるための準備として、ケム型疑問文を取り上げ、記述分析をおこなった。用例群の成立過程について見通しを得られたと思うが、実証は十分でない。動詞の分析、潜伏疑問文との関係、疑問詞「イカガ」をめぐる問題等の考究は今後の課題であり、機会を改めて論じたい。間接疑問文の成立論は、係り結びや疑問文の研究を大きく進展させる可能性を秘めていると思われる。今後さらに考究を進めていく必要があるだろう。

引用文献

- 伊藤博(1975)『萬葉集の表現と方法 上』（古代和歌史研究5）塙書房
 出雲朝子(1985)「〈はさみこみ〉について—文法史的考察—」『国語学』143: 14-26
 片桐洋一(1968)『伊勢物語の研究（研究編）』明治書院
 片桐洋一(2013)『伊勢物語全読解』和泉書院
 金水敏(2012)「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」『国語と国文学』89(11): 76-89
 金水敏(2015)「日本語の疑問文の歴史素描」国語研プロジェクトレビュー, Vol15 No. 3, 108-121
 衣畑智秀・岩田美穂(2010)「名詞句位置の「か」の歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』6(4): 1-15

- 衣畑智秀(2014)「係り結びがもたらす疑問助詞の分布制約—日本語史と琉球語から—」日本言語学会第148回大会予稿集
- 小松英雄(2012)『[増補版]仮名文の構文原理』笠間書院
- 近藤泰弘(1987)「古文における疑問表現」『国文法講座 3』258-277 明治書院、後に、近藤(2000)「中古語の疑問文」と改題し『日本語記述文法の理論』275-294 ひつじ書房所収
- 松尾捨治郎(1943)『助動詞の研究』文学社
- 野村剛史(2002)「連体形による係り結びの展開」『日本語学と言語教育』11-37 東京大学出版会
- 野村剛史(2005)「中古係り結びの変容」『国語と国文学』82(11): 36-46
- 小田勝(2015)『事例詳解 古典文法総覧』和泉書院
- 佐伯梅友(1953)「はさみこみ」『国語国文』22(1): 62-66、佐伯(1966)『上代国語法研究』2-32 所収
- 阪倉篤義(1975)『文章と表現』角川書店
- 高宮雪乃(2004)「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」『三重大学 日本語学文学』15号 124-111
- 高山善行・青木博史(2010)『ガイドブック日本語文法史』ひつじ書房
- 高山善行(2015)「疑問文とモダリティ形式の関係—古代語の場合—」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究報告書(2)15-27
- 山口仲美(1984)『平安文学の文体の研究』明治書院

[付記]本稿は、本研究プロジェクトの研究発表会(2015年6月7日、大阪大学)における口頭発表を基盤とする。発表の際、ご意見をくださった皆様に感謝申し上げます。本稿の内容は発表の前半部分を中心にまとめたものであり、発表後におこなった調査、考察の結果を加えている。